

お念珠づくり

①念珠とは

念珠（ねんじゆ）は仏を念ずる時に用いる珠との意味の仏具です。

普段、念珠を持っている時は、房を下にして左手で持ちます。

合掌の時には、両手の親指以外の指を輪の中に入れ、親指と人差し指で軽く挟むようにします。

自分とは違う宗派の葬儀に出席する場合にも、自分の属する宗派の念珠を持参します。

②念珠の起源

お釈迦さまが、国中に疫病が流行って困っている波流離（はるり）国の王に「百八の木患子（もくけんし）の実をつないで、いつも手にして心から三宝（仏・法・僧）を唱えなさい。そうすれば煩惱が消え、災いもなくなります。心身も楽になるでしょう。」と語ったことが、『仏説木患子経』に説かれています。三宝は「南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧」と称えることです。木患子とは羽子板の羽根の重しになっている木の実のことです。

お釈迦さまの教えが経典となって広く世間に流布するのは、お釈迦さまが涅槃に入られてから五百年ほど経ってからですが、その間に念珠も数の概念や、ひとつひとつの玉に意味づけがされ、経典にも説かれて、仏具として欠くべからざるものになっていきました。

仏教が中国より伝来した時に、念珠も一緒に入ってきました。正倉院には、聖徳太子が愛用された蜻蛉目（とんぼめ）金剛子の念珠や、聖武天皇の遺品である水晶と琥珀の念珠二連が現存しております。すなわち天平年間にはすでに念珠が伝わっていたこととなります。それが仏具として一般の人々にも親しまれるようになったのは、鎌倉時代以降のことです。

また、シルクロードから西へ伝播した念珠は、ロザリオとしてキリスト教でも使われています。

③真宗門徒の念珠

浄土真宗では、称えた念仏の数にこだわらないため、念珠の珠を爪繰りません。

そのため珠の数に決まりはなく、形状にもこだわりませんが、合掌礼拝の際に用いる仏具として大切にします。

男性門徒用の念珠は、単念珠を用います。門徒は、二輪念珠を用いないのが一般的です。

単念珠の房は、「紐房」に仕立てたものを用いるのが好ましいとされます。

女性門徒も、単念珠を用いるのが一般的で、房は「切房」を用いるのが好ましいとされますが、紐房でも構いません。

④念珠の種類

素材

木の珠：木の念珠は、黒檀、紫檀、鉄刀木、白檀、つげ、梅、星月菩提樹、金剛菩提樹などでできています。

石の珠：石の念珠は、水晶、メノウ、ヒスイ、サンゴ、オニキスなどでできています。

珠の数(目安)

主玉の数	男 20 個	男 22 個	男 27 個	女 36 個	女 33 個	女 27 個
主玉	14~15 mm	12 mm	10 mm	7 mm	8 mm	8~9 mm
親玉	20 mm	16 mm	14 mm	10 mm	12 mm	13~14 mm
二天	12 mm	10 mm	8 mm	4~5 mm	5 mm	6~7 mm

丸四つだたみ

主玉 (合計27個)

二天玉

親玉

6個

1

4 本のみもを開いて十字におく。中央に鉄砲カンがある状態

2

右回りにひもを重ねていく。A を B に重ねる

3

同様に B を C に、C を D に重ねて、最後の D は A を重ねたときにできた輪に通す

4

四方にひっぱり引きしめる

5

1 回結んだところ

とめ結び

1

ひもを芯と結びひもに分け、芯に結びひもをかける

2

引きしめる

3

できあがり